棚尾地区まちづくり事業
平成 27 年 12 月 17 日（木）19 時～
棚尾公民館 3 階

第５０回　棚尾の歴史を語る会　次第

1　前回までのテーマに関する参考意見
　志貴荘, 国勢調査記念石柱など

2　テーマ 81　名鉄臨港線大浜口駅
　説明（磯貝国雄）
　出席者による補足説明、感想など

3　テーマ 82　大浜臨港線運送株式会社
　説明（磯貝国雄）
　出席者による補足説明、感想など

4　連絡事項・情報交換など

5　次回日程
　第 51 回棚尾の歴史を語る会　　2 月 18 日（木）7 時から　「毘沙門天、妙福寺」

棚尾の歴史を語る会　テーマ81

「名鉄臨港線大浜口駅」

1　要旨

江戸時代から明治時代前半までの貨物輸送は主に船に頼っていた。その後は鉄道輸送が盛んになり、現在の主役は自動車である。この地方でも、明治時代までは源氏橋付近が川船の棚尾港として栄えた。

今から約百年前の大正3年（1914）に、名鉄三河線の前身である三河鉄道が刈谷新駅～大浜港駅（現在の碧南駅）間の営業を始めた。翌4年に大浜港駅から臨港線が延長され、海陸連絡の大浜口駅が開業した。

大浜口駅の位置は、源氏橋の南西で堀川に面した場所である。衣浦港から堀川まで船で運ばれた貨物は、ここから貨車に乗せ替え刈谷駅まで行き、東海道線に連結され全国へ輸送された。貨物の主なものは石炭であった。しかし、戦時中の貨物量減少などにより、大浜口駅は終戦後の昭和21年に役目を終え廃止された。

現在、まちづくり事業によって、この付近を大浜口広場と名付け、整備工事が進められており、来年3月には完成する予定である。

2　三河線の沿革（碧南市関連）

西暦	和　暦	事　　項
1911	明治44年	碧海軽便鉄道発起人才賀藤吉ら31人に知立町～大浜町間の鉄道敷設免許が認可される。
1912	明治45年	刈谷市正覚寺で碧海軽便鉄道創立総会を開催して、社名を三河鉄道と変更して設立させる。 刈谷市大生座で鉄道建設工事起工式を行う。
1914	大正3年	刈谷新駅～大浜港駅間開通。（北新川駅、新川町駅、大浜港駅開業）2月5日
1915	大正4年	新須磨駅臨時開業 新川臨港線（貨物）新川町～新川口間開通、0.6km 新川口駅開業　8月17日

		大浜臨港線（貨物）大浜港～大浜口間開通、0.4km 大浜口駅開業 11月29日
1920	大正9年	大浜町～蒲郡町間に鉄道敷設免許認可される。
1925	大正14年	蒲郡線起工式を大浜尋常高等小学校で行う。
1926	大正15年	大浜港～猿投間が電化される。2月5日 電化と同時に新須磨駅を常設停留所とする。 大浜港駅～神谷駅間開業。（玉津浦駅、棚尾駅、三河旭駅開業）9月1日
1928	昭和3年	神谷駅～三河吉田駅間開業する。
1935	昭和10年	玉津浦臨港線開業する。玉津浦駅～大水落地内
1941	昭和16年	名古屋鉄道㈱と三河鉄道㈱が合併し、名称が名鉄三河線となる。6月1日
1946	昭和21年	大浜臨港線廃止。8月1日
1954	昭和29年	大浜港駅から碧南駅へ駅名を改称する。
1955	昭和30年	新川臨港線廃止。2月10日
1959	昭和34年	知立駅が新設される。 玉津浦臨港線廃止。
1961	昭和36年	貨物営業を廃止。（玉津浦駅）
1965	昭和40年	貨物営業を廃止。（三河旭、棚尾駅）
1966	昭和41年	無人化（棚尾駅、玉津浦駅）
1968	昭和43年	無人化（三河旭駅）
1977	昭和52年	貨物営業を廃止。（碧南駅、新川町駅、北新川駅） 尚、この年に衣浦臨海鉄道碧南線が開通する。
1981	昭和56年	新須磨駅を移設し、碧南中央駅と改称する。
1990	平成2年	碧南駅～吉良吉田駅間にワンマン運転のレールバスが運行を開始する。
2004	平成16年	碧南駅～吉良吉田駅間の廃止。
2006	平成18年	知立駅～碧南駅間のワンマン運転が開始。 駅の無人化（碧南駅、新川町駅、北新川駅）

3　衣浦湾と東海道線を結ぶ三河鉄道誕生

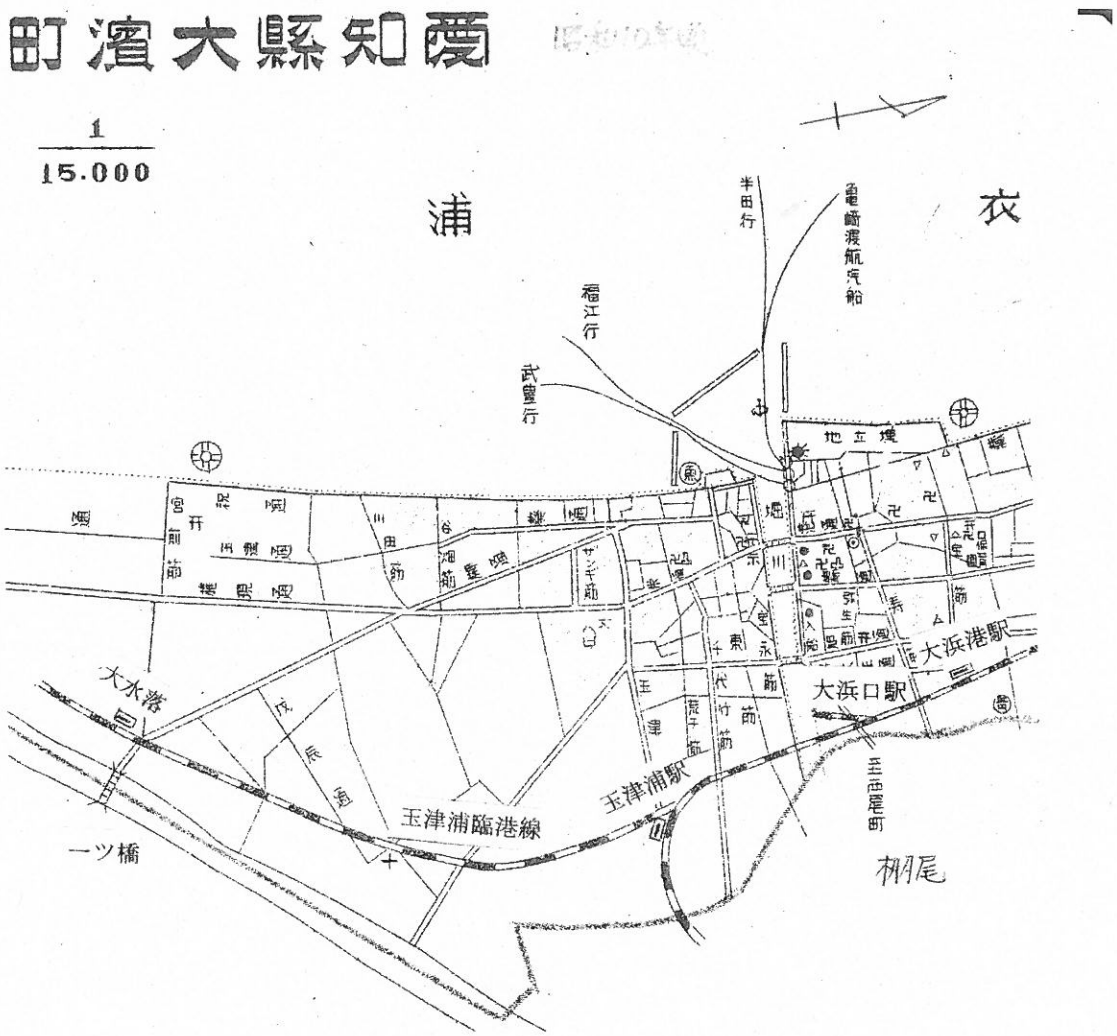
出典：写真集「三河の街道と宿場」から抜粋

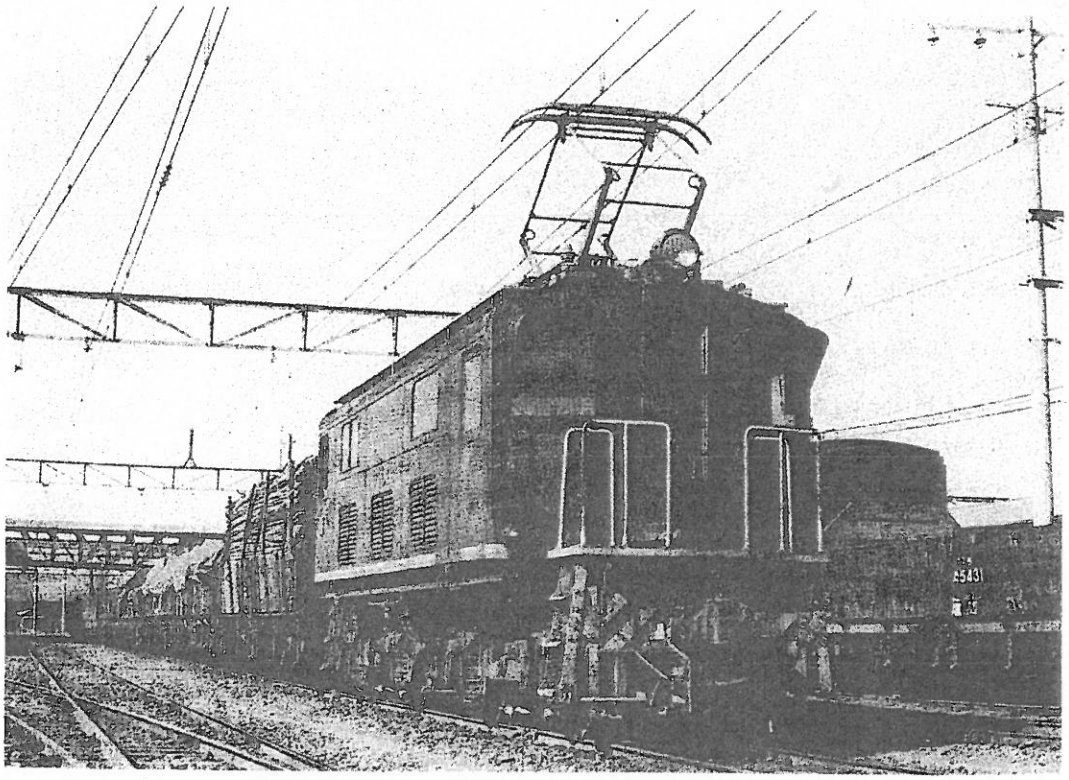
知立、刈谷、高浜、新川、大浜などの衣浦湾岸の各町も、鉄道敷設計画を立てた。当初は狭いレール幅で計画し、碧海軽便鉄道と称したが、明治45年（1912）5月の設立の際に三河鉄道と改め、最初から東海道線に直通できる軌間1.067mの鉄道として開業することに変更された。

大正3年（1914）に刈谷新駅～大浜港間を開業し、翌年には知立～刈谷新駅間を延長、さらに新川と大浜では貨物用臨港線を開設し、衣浦湾岸と東海道線を結ぶ海陸連絡の目的を果たした。

この三河鉄道は蒸気機関車7両、客車14両を保有したが、貨車は130両も保有しており、港と東海道線との連絡を目的にしていたことが分かる。

又、開業時に設置された駅は駅構内が広く貨物の積み降ろしホームがあるのが通例である。しかし、その後設置された駅は乗降客専用駅が多い。





刈谷駅構内の貨物の入れ換え作業
（刈谷市南桜町・昭和47年）　三河線各駅から集められた貨車は、刈谷駅で編成に仕立てられ、名鉄の機関車によって国鉄線まで運ばれた。その先は国鉄の機関車に牽かれ、全国へと出発していった。
（岸義則氏撮影）

4　大浜臨港線

大正4年（1915）11月29日に、海陸連絡を目的とする貨物専用の大浜臨港線（大浜港～大浜口間0.4km）が開通し、大浜口駅も開業する。尚、この年に、在郷軍人会大浜町分会の勤労奉仕により大正通りの道路が造られている。

（弥生町の斎藤正雄さんからお聞きした話）

戦後、昭和25年ごろ名鉄から大浜口駅の土地を購入し、製麺店大森屋を営業した。この土地には、縦に地面に打ちこまれた枕木が残っていたことを覚えている。堀川に面し、ここだけは護岸がなくて、船の荷物が直接陸揚げできるようになっていた。

「大浜臨港線運送株式会社」

1　要旨

玉津浦駅から岬町 2 丁目の一つ橋排水ポンプ場まで、（通称）玉津浦臨港線が昭和 10 年（1935）に開通した。衣浦港に到着した石炭などの貨物を、蜆川を利用して一つ橋付近で陸揚げし、貨車で玉津浦駅に運搬するものである。ここからは三河線を経由して刈谷駅から東海道線で全国に輸送した。

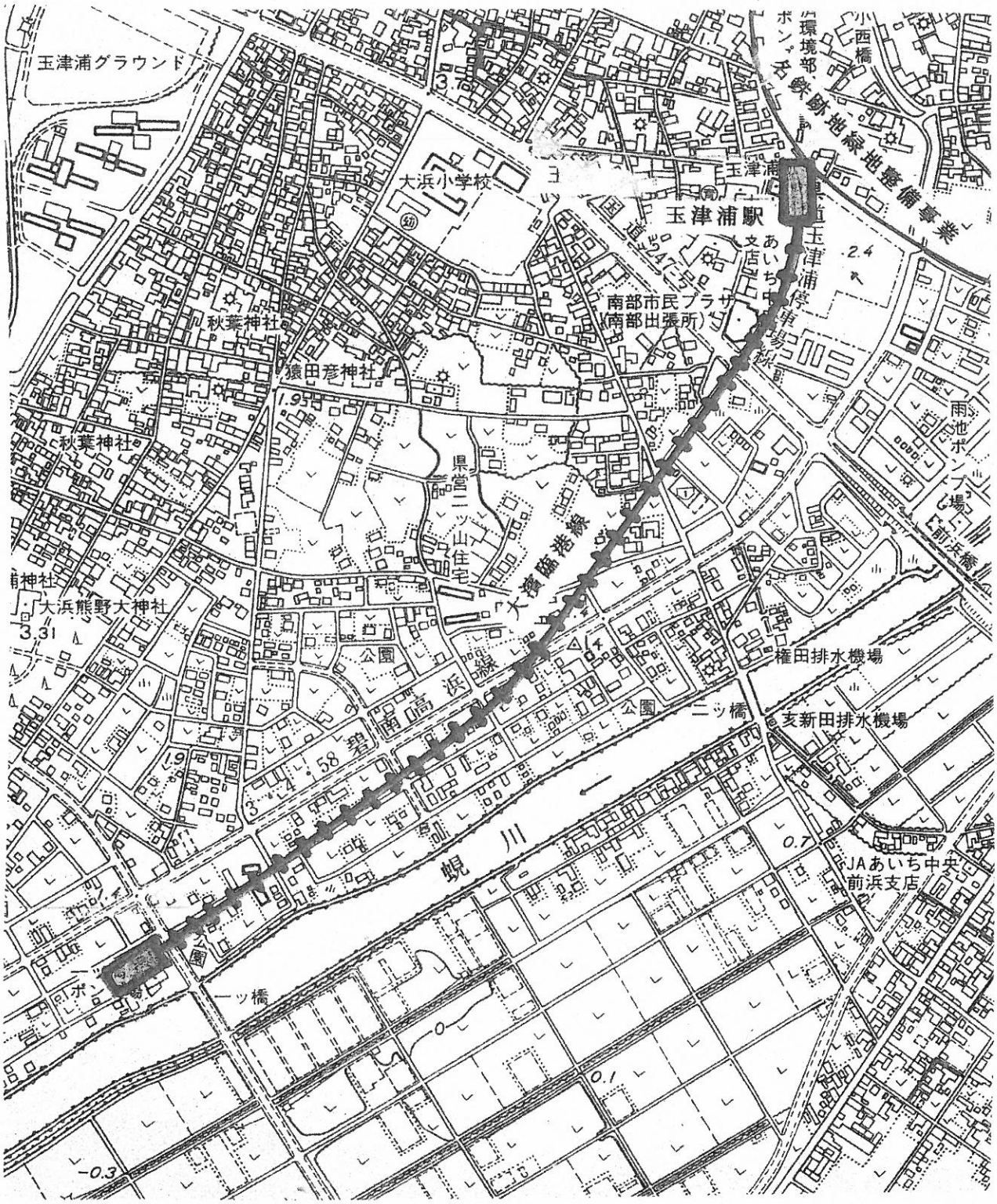
この鉄道は大濱臨港線運送株式会社が経営し、社長は平岩鉄工所の平岩種治郎であった。戦後はこの線路を利用し、名鉄が海水浴シーズンに電車を走らせ、観光客の利便を図った。しかし、昭和 34 年に伊勢湾台風に襲われた後、廃線になった。

現在、一つ橋排水ポンプ場内に、臨港線建設に功績のあった渡邊秀治氏の顕彰碑が残っている。碑は現在進められている、まちづくり事業で玉津浦広場に移設される予定である。

2　玉津浦臨港線

⑴　経緯

昭和 10 年玉津浦駅～大濱町字大水落（現在の岬町 2 丁目一ツ橋ポンプ場の位置）間に構外側線が引かれ貨物輸送を開業。主に衣浦港に荷揚げされた石炭を、蜆川の一ツ橋付近まで小船で運搬し、貨車に積み替えた。又、戦後は玉津浦海水浴客の利便を図るため電車を走らせた。しかし、伊勢湾台風の後昭和 34 年（1959）12 月 3 日に廃線となる。


玉津浦グラウンド
大浜小学校
玉津浦駅
南部市民プラザ
(南部出張所)
秋葉神社
猿田彦神社
県営二ッ山住宅
大浜熊野大神社
公園
碧南高浜線
大浜臨港線
権田排水機場
二ッ橋
支新田排水機場
JAあいち中央
前浜支店
幌川
一ッ橋
雨池ポンプ場
前浜橋
小西橋
玉津浦停車場線
環境部
ポンプ場
砂防地緑地整備事業

⑵　顕彰碑

現在、岬町の一ツ橋ポンプ場内に石碑が保存されている。この碑は、臨港線の建設功労者である渡邊秀治氏が、昭和13年に亡くなられたのを悼み、大濱臨港線運送株式会社（社長平岩種治郎）がその功績を称え建立した顕彰碑である。

碑文は次のとおりである。

表面

故渡邊秀治君之碑

裏面

故渡邊秀治君千葉縣夷隅郡西畑村之人卒日本
大學法律科之業明治四十五年五月為三河鐵道
株式會社社員昭和二年十月累進支配人十年一
月退職君在社凡廿五年忠實應任拮据経営該社
之隆君之功居多會同社畫臨港線之建設十年八
月成矣先是君圖設立大濱臨港線運送株式會社
東奔西走十年七月克創焉爾来夙夜黽勉期其盛
大惜哉天不假壽昭和十三年一月廿一日遂以病
没享年五十有七茲建碑而傳其功於無窮矣

昭和十三年四月

大濱臨港線運送株式會社　社長　平岩種治郎
三河鐵道株式會社　専務取締役　平田重兵衛

（読み下し文）

故渡邊秀治君は千葉縣夷隅郡西畑村の人なり、日本大学法律科を卒業し、明治四十五年五月に三河鐵道株式會社の社員となる。

昭和二年十月支配人に進み、昭和十年一月に退職する。渡辺君は凡そ廿五年間会社に在籍し、任務に忠實で、経営にはくたくたになるほど働き、この会社の隆盛に貢献した。

同社の計画する臨港線の建設は昭和十年八月に完成した。渡辺君は、この大濱臨港線運送株式會社の設立を図り、十年七ヶ月の間、東奔西走し、朝早くから夜おそくまでよく勤めあげたので、遂に完成し、事業も大いに盛んである。

しかし惜しい哉、天は彼に命をあたえず、昭和十三年一月廿一日遂に病に以って没す、享年五十七歳

茲に碑を建て、其の功績の偉大なることを傳える。

昭和十三年四月

大濱臨港線運送株式會社　社長　平岩種治郎

三河鐵道株式會社　専務取締役　平田重兵衛

3　大浜臨港線と玉津浦臨港線の混同

この資料を作成するに当って便宜上玉津浦臨港線と名付けたが、これまでの資料に玉津浦臨港線の名称はない。名鉄の記録では、大浜口までの大浜臨港線が年表に載っていて、玉津浦臨港線に関しては構外側線としか取り扱われていない。

碧南事典は「堀川まで、のちに蜆川一ツ橋南の大浜口まで延長、昭和21年貨物輸送廃止」と記述されている。

4　玉津浦駅の話

海水浴場と赤十字活動・玉津浦児童保養所事業の歴史

玉津浦はその名に恥じないたいへん美しい海岸であった。夏季には新須磨海水浴場と競い合った様々な誘致策もあって、玉津浦海水浴場にはごった返すほどの客が押し寄せたものである。

この海水浴場は、当時としては珍しい教育活動の歴史を持っている。大正10年（1921）日本赤十字社愛知県支部は県内の身体虚弱・腺病質児童を対象に、児童保養所事業を開始した。夏季、海水浴を中心にして体質改善と健康増進を図る事を目的としたものであった。まず最初に選ばれたのが、この玉津浦で、大正15年には内海、昭和16には三谷にも開設されたが、戦後も再開されたのは、ここ玉津浦だけである。

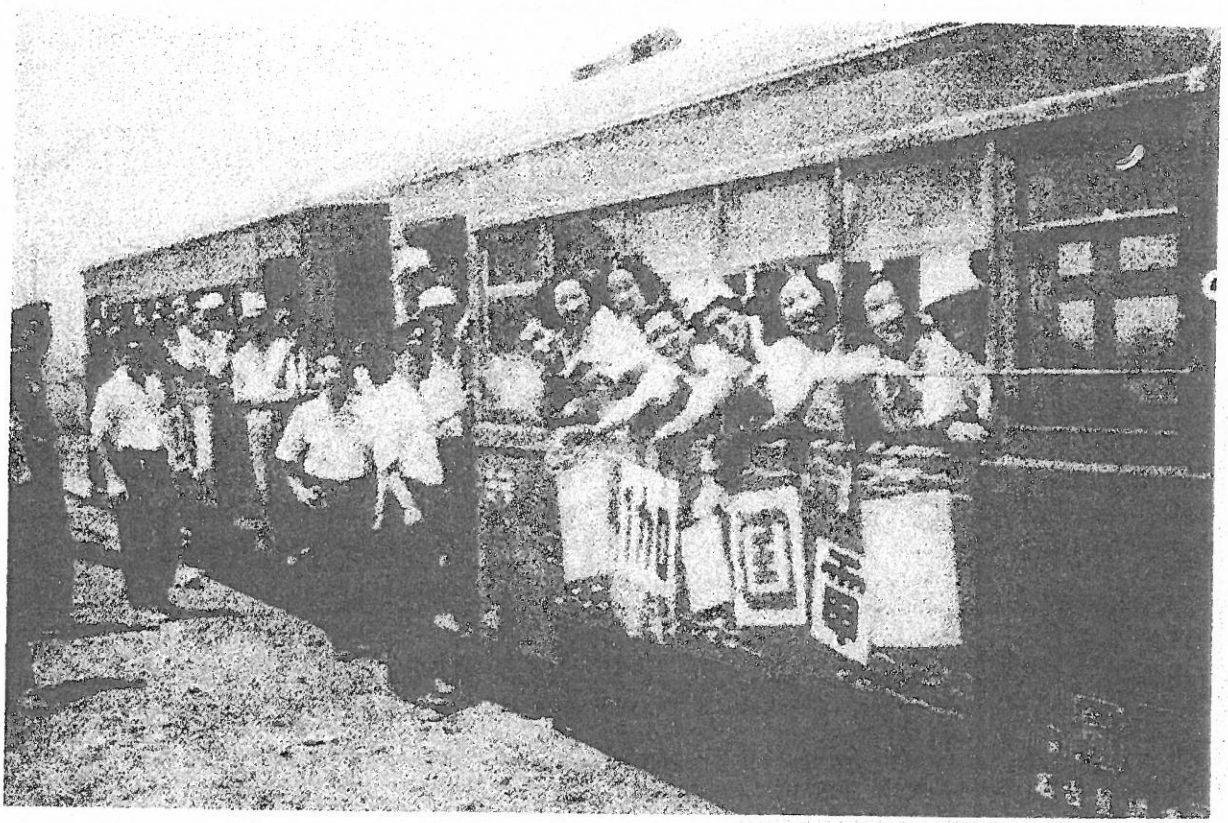
近くの大浜小学校を自習所兼宿泊所、海水浴場に隣接する大浜熊野大神社を林間保養所として、地元開業医や小学校教員の応援を得て行われた。この事業の開設期間は25日、定員は100人であった。

定員の増減や開設期間に若干の変更はあったが、伊勢湾台風の被害による護岸工事などによって、設置が困難となった昭和39年まで続けられた。この間、四十年祈るような親の思いに送られて、若干の寂しさと期待を抱いた八千人に近い子供達が、この玉津浦駅に降り立った。今もこの玉津浦の名を懐かしい思い出の中に置く県民もいるはずであ

る。

5　海水浴客を運んだお伽の国電車。

戦後、海水浴客の利便を図るため電車を走らせた。この電車は「お伽の国電車」と呼ばれ碧南の観光に貢献した。当時の運賃は玉津浦駅～貨物駅（当時の駅名：「玉津浦海岸」）5円であった。



海水浴客を運んだお伽の国電車（碧南市・昭和25年頃）
海水浴客の利便を図るため、玉津浦駅から延びる貨物用構外側線を利用して電車を走らせた。当時の運賃は玉津浦―玉津浦海岸間5円であった。（碧南市提供）